寛永諸家譜

藤原氏癸廿五冊之内五

支流

118

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (118)
函號 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

脇坂

寛永諸家系圖傳

藤原氏　癸巻

支流

脇坂

安明

弁分　江別小代郡脇坂の荘の人なり

永禄十一年観音寺合戦の時ここに討死

源勇院と号す　法乃妙心寺の内なり

浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

安治

甚内　従五位下　中務少輔

天文十三年　近江脇坂の荘に生る

永禄十二年　明智日向守光秀織田信長の命をうけて丹波国黒井の城をかこみし時赤井悪右衛門尉直正をせむる時さ安治十六歳にして艶才蔵ほまり氏を篠どあつさむ此に同じく明智が手に従ひ黒井の町口の簀戸を切やぶりき内にいりて十文字の鑓をもちいしる敵兵と戦これをころしみせ首をとり其鎧刀脇指までをとる

同年江州北の郡にしてはじめて豊臣秀吉につかふ此年禄米三石をくりたまふ

元亀元年　播州野田福島にしてごらうの三好が逆徒を退治せんとて信長

教義為を率し八月ハ日小倉ハ
ハ九日豊田筑後為をゝみせ為而
又大坂の門徒党体をゝろくして一揆を
誘惑し信長と相ゝゝ秀吉ハその
内迫江国小谷郡浅井備前也敗ら
小谷城のをゝくへ横山の城有
逗留しゝまゝゝゝゝゝ播州の一揆
蜂起をゝゝて江州ら落地を勇
多へ廻りいそぎ京都へのぼらと

まゝとゝ小姓年ワゝゝゝのをば長
浜ら引ゝ引ゝ羽柴筑前守と申
安治ハ此ゝゝ十七歳なら此度の
所働かゝつまられゝゝ事を感
ゝ たりひ鹿隠乃介沈せんと思
ゝゝろよりゝゝ秀吉ハ渋賀を
長浜ゝゝゝゝゝ大津へまゝゝと云て
云ゝゝゝ出びてゝゝの紅ゝゝ笹を
づゝかゝれ居らけをば船事ゝ

ぜも三〳〵ぞ〳〵て三日大津より船を
漕出し三井寺安治が所へ立あがり松の
の色小紋織て秀吉御
馬をまち川秀吉御
さまひていの所いさどりと命を
そひさせられさる事曲事とおも
ふ所ろ三れども若輩所ろの
こゝろざしある事を感じ三まふとて
そ御家を傳ずつゝとれ家ゐるべ

まき船ゆく〳〵長濱より かつをぶしを所ろ
安治かこまりて三と乗まき大津を
志のひいで〳〵京都へ三をぼろと濱
の橋乃色ゆく〳〵家をわ〳〵又道治よ
所ろて秀吉をまち川秀吉馬より
安治を見三ゆひ命をもひぶく
かさ称てこれまで来御事いよ〳〵を
事ろと人ども御さまろぶを
感じ〳〵まひてそれより秀吉御家

智のうをかくそ〻庵後〻けり
秀吉九月十四日 柴田勝家 丹羽長秀
さまふかく国ゆくころよ越前の国知行
左馬允義景 江州浅井が勢を倍
し大はつの元亀元年 織田信長
信長 野田福島をひきたりそさ京ち
江州うちをしひこまよ秀吉もおもむく
江州かたうちこゆ安治うちにて
ゆけりと秀吉高槻の亀みて見
たまひ御馬なりびり馬具高とと
二人をとはたりまる江州よりとがひゆく
安治れたりたりづめく猪馬の武者
と動り
天正四年 信長 江の国安土山
城を築さまふとさ丹羽長秀命
長秀月命じて正月に安土
山りいたり 浅国自おのづく安土に
とりしさ四月 五とたり者を

日ゝにおもむいそぎけるとき安治
秀吉へ使として僕一人ゝ和泉
せんりやうが長秀が命ゝ秀吉へ下
ゝ大工を人足あまたに荷をそな
ゆくを見るとて大いづくにかゝる
ゝて柿へとぶらの縄を切て
たとしけるとき安治の命ゝ再り
人足あまたうちてかりをけるとをひ
ちし事を人聞てとゝくらし

秀吉これをきゝてひかに菅沼へ
こゝさらひをたこと事也事な
ゝて安治を折檻をべしあ
ゝしとき長秀かゝりて秀吉へ
宅ゝこゝうて安治が忠節を称し
稱ゝへことゝあゝゝ安治をゆ
され剃ゝへ忠節ゝゝてこゝ
百五十人の地を給
四六年摂へ國乃別所小三命七治

三木の城にうつりて
長の命をうけて大軍を率し
播磨を攻こまふとき合戦山道にて
うちたる播磨の敵ども多くあり
母衣あり秀吉これを取出
ちかづくものをみわたすに
べきとのたまふこゝにみなもの安治
こゝ作母衣をばけづりとりさて
ひらけたること自それ母衣を

ひけ三木の城下あり神をあなた首
をとり秀吉感じたまひ向ふ
播磨を海が家の敵ありとゝ
ひきまふこれ多くあり浜辺
白き播磨を服部坂が敵とこゝとさ
回回神吉城神吉民部別所と
ひをあらせ三木へかゝりければ秀
吉まゝ神吉城を取かこん
せたまふ安治大手まで攻

ようす時塀下みて秋地みて軍
をうれうどこちたく眼をつ
地下例也あ宮野偽下兵ねす同傳と号
安治を刻さくたたけく志ちぞかん
と安治出さあごちてこれ初め
ゆめ志ひとぞうん事いとに切
うべくして志だくあ悪やとあ
て一書有大のにうと家いうあ
偽下命を安治ようぼさくちけち

これをうめく多勝一度押破り
城をも城を貴蔵くう
同十一年冬秀吉と柴田勝家
勝家と江刈志津岳柳瀬表みく
合戦のとき安治をみく一書を
とあいと秀吉感状をまみる詞
あいうく
今秀吉七度後係敵法列大梯
そこ陣に変柴田瀬地竜之

柳沢表ゟ参候て一戦
一清須城向ゟ敵源右
子盛付ル秀吉船前合一番槍其
働ニ付ル而ハ廉ニ成ル之家
ハ年ハ向ル伝ル勇ル
伝和吉迄仍如件

天正十一
六月廿日　秀吉判
脇坂甚四郎

元ふ与て山城の国下ハ尾と大井ハ
以取ル〳〵食録之ハ伝と此
時ハ七人の侍を七本槍と称ス
同十二年伝長ハ二男伝雄
乃家長勝川之郎兵衛利
ゟ子と秀吉人領有ゟ安治有
あづかり給ル伝雄と秀吉と兵
をたゝかひ給ル勝川ハ安治をさゝ
人領をとりかへさんとゝいたりて

瀧川がるの母病篤大事なら討死
せさせんといつたら所望はとふ
安治ちらと眼ちらと見てそして
親子乃うれへを憐わさるに涙を
ゆうとせぬさ瀧川又ともに伊賀
國耳ぐを切上野の城を攻ごろ
秀吉瀧川が伊賀かゆくこさ招ひ
く安治も瀧川が人質を寄竹ふ書
人質をかくれうわさ海乃ひ乃

まふかれで秀吉大耳いらこまふ
安治勢憤のまく伊賀ようもしき瀧
川又るがこりりもしみくうと上野の城を
攻く討死とふといふこさ秀吉泳
いさどりわく海小分めて瀧川又る
をせめ捕ぐく平給瀧川と一味て
係報ぐて為ざあるを形ちわ
のくまふとこさ安治なるぐを刺がし
自天ぐ厚恩とつとれ報逆の瀧川ま

みをゝさせ有あるとして母を人質
に取おしゝ白須賀城を落して益田
を伊賀へ入国の云うかれしく秀吉使めく
瀧川又ゝを討とる形ら味方を結
軍忠わるをもかゝる中仙を安堵
させ城中へ人質をもとめとゝ
いして国侍を一味せさせ兼中
しのびく上洛の事をこゝろゝ兼
有せめおとしその城をとる瀧川又ゝ
を伊賀の国へ逐電を此孫秀吉
へ注進しけれゝ秀吉親長
さまひとゝめ山岡兵部守を使
みゝゝを戒めを労しゝ仙を増田太郎
長盛を使として国の事申国
をゝしに船ゝと安治書をとゝせゝく
国の宿ゝ為く注進しけるゝ秀
吉国書をとゝまゝ

書時々被尺仍之国々着袋
地後去九七日出羽ヲ中仙道
城々被却々城ヲ無数ヲ相
寄仙道ヲ此表後年ノ際まで
押詰ヲ被而ハ敵大別田以下
ヲ対対城ハ之ケ所ヲ之之日
内ニ四隅ヲ方ヲ来有之日ヲ之国
為尺過ニ之ヲ通ニ太閤ヲ被却々
成しお所ヲ々之ヲ那ヲ若新

通ニ之ヲ方ヲ城ヲ紙ヲ何篇ヲ城為
尺過ヲ通し尺内々ヲ意作
此方ヘ通ヲ申ヲ申ヲ相通ヲ
尺寸作通

十月九八日　秀吉朱印

書状ヲ被尺仍之国々ヲ人　昭以基門院
奥九お所々ヲ未塚破却々
能不仕事　之ヲ仙表取出

先文書ニ申付置候儀出来仕
条々之中ニ明候し条也ニ付而、
自分如何様之儀ニ成共其
意入急度可申付也

十一月廿九日　秀吉朱印

安治ニ与ヘ伊賀の国を治ム年貢
を以て国中乃士ニ給ヘ申ベ
き之旨被仰付候ハヽ

ものを成敗をくゝ仕置法度を定
申べしむゝ与さゞハさゝ伊賀の
国ニ与ヘ治ム国ニ下知有之
かゝれ申

同十三年ゝ月安治を伊賀の国ニ与
掃部国紙野郡有之ニ付ニ遣
ハ万石を給ル　同七月秀吉関白ニ
任ぜらるゝ安治ハ従下ゝ叙し
中納言ニ補ス任ぜ八月ゝ紙野ニ

大和へ囲を取の塚まうつて二万石を
給ふ　十月淡路国をひらく三万石を
ゐるして　次郎の城ありうける
同十四年　薩州列大守淡路殿明吏
義久を九州へ秀吉の命
有さつんぎうにより九月二日より
仙石権兵衛尉秀久　ねう越前守　を先後の
囲りとうにて　義久の食井淡路
中務大輔　義久を大将として先後へ
囲境の陣を取仙石権兵衛尉秀久
長曽我部元親　服部中務大輔安治
加藤左馬助　赤松左近将監　大友
義統　豊後を取　淡路家久と戦ふ
長曽我部を討死　仙石を敗軍
大友を攻あるのども　修理亮討られ
けり　安治　赤松　左近将監　そびしてあひ
そふ　此事大坂へきこえ十二月
廿二日に秀吉　中務を責ふ

去十八日ゟ高松城ゟ大坂江相見
さ候國と云ふの城取巻ける
義統を始そこの せ事こわるれ都合
ゟ取ゟ申ふ及ふ 此ゟ相見 相果
也 我郎 家内 補 何方こ有ふく
小こさ海ゟ ふ ふい 巻 兼
國へ 相移 小寺 方 兼ゟ 候 て 相
聞 沢 賀 河 波 ゟ 為 ふ 物 と 此
中 ゟ 一 ま こ て 御 命 動 て ふ

世間ゟ月 沈 越 ふ 出 取 ふ 申 ふ 事
作 此 弟 和 も 為 人 ゟ へ て 巻 ふ

十二月廿二日　秀吉朱印

服部中務少輔ゟ
ゟ へ 精 と 入 ふ て 注 進 ふ 出 て
ゟ と ふ 作 ふ て

同十八年 治 い ふ ふ ふ ふ ゟ り
ゟ と 秀吉 九 列 表 へ 發 向 し ふ ま ふ
べ ふ ふ 花 御 家 ゟ と ゟ 申 ふ と て

安治日向国飫肥城へ兵粮をこゝろ
の名二月二日大坂へ注進を秀吉
感ぜしめられて返簡をさゝる
去二日こゝ元へ今日十四日到来賛
元二十年前今渡海ゝ中元亀元
年間柄へ兵粮兵船ゝ神妙作
之面ゝ敵国動解中ゝ者ニ下
敵兵悉仕立軍船出馬ゝ
給事者一仕形手下者也

二月十四日　秀吉朱印

服部中務丞へ

同二月朝日ゝ秀吉大坂を発向して
九列かいゝ四日朝日ゝ巖石の城を
せめまふとさ安治一方を案内そ
日ゝ落城そ薩列三城郭平作
の塀をせめまふ安治九兄大隅守赤隆
か薩摩馬州赤明先手として塀下の
川まで船ゝ押ゝ城をかこん

相模せめうせ安治城の塀まで付
家人とりかこ城を攻山城ち忠昭
人質をいざさんと和をこふ
て安治人質をとりて こ陣をひき
かへる元ちと相ケ原の陳郭を攻落
鴻池義久降参ち九列所くの城を
秀吉有鴻池本領を安堵し四方
太平を唱ふ秀吉薩列子代川の意
を平ら陣をとりしをひて依勝に

投持方下紙運送のこの子代川
船橋をけさせふさ安治九晃
大隅守か家ち馬物本紙と
同十八年小隙ち京ち氏政子忠氏を
秀吉有ちさざんにらして相列
小田原ち敵向せらる安治九晃大隅守
赤隆か家ち馬物赤明長雷我紀元親
等を船もて大将して二月中旬
我先ゐと海上を海ちらしぶ安治同

廿八日遠州今切より兵船ゝ秀吉へ
書を献じて江進ゝれを感悦
なり〻ぞ〻て四海をさまる

廿九日三十遠州今切漂船
岸〻に江進切〻〻に日出次第
志水へ〻に茶屋多出来越後
板こてはたらく商人を先に兵船
〻に乗せ江戸へ帰り明日朝ら
至沙馬し乗物に乗り浜松迄進こ

江進着出仕
山中橋内下屋敷

二月晦日　秀吉参内
昨日中納言補ゝ

廿七日猪川清水より兵船を伊豆
廿四下田城海辺なれば先此城を
せめて諸将をゝ評定ゝ安房
廿九日有山ゝを秀吉へ注進を氏
歌ゝ〻ゝまひて又書をさまる

三月九日 江州進発 四日 柏原
枝尾九七日 [illegible] 清水寺 [illegible]
[illegible] 石屋 [illegible] 神明 [illegible] 切 [illegible]
[illegible] 感 [illegible] 九尾 [illegible] 伊豆地
神平 舟 [illegible] 七尾 [illegible] 水風 [illegible]
[illegible] 越 [illegible] [illegible] 大柳に
[illegible] 城 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
七束 大義 [illegible] 山中 橋 四 [illegible] 地

三月四日

秀吉 朱印

服部中務 [illegible]
清 [illegible] [illegible] [illegible] 船 [illegible] 家 [illegible] 別
下田 [illegible] 城 [illegible] 七八町 [illegible] 東南
小山の [illegible] 船 [illegible] 船 [illegible]
あづち 下田 町 [illegible] 柴 [illegible]
[illegible] [illegible] 大 [illegible] 戸口 [illegible]
攻 [illegible] 秀吉 三月九日 小山中の城を
せめ [illegible] 四月二日 小田原の [illegible]
せめ [illegible] 下田 [illegible] [illegible]

一

服部九兵衛之人を小田原へ召れ
を松山に附城をうまへ長雲我米を
下田のをさへ之人を船に
乗海上より小田原へ向ら城の南の
濱を平川口をうめ安治塚の矢倉へ
大筒をうち入せめらこと程下田の城を
降参しけるさ秀吉ゟ安治を
つかわして下田の城をうけとらかわて
小淵方に関東数ケ所の城落去

小田原の城を七月七日に没落去れ
ぞ秀吉此うへ去年ゟ有ていろ
まで味方に依幸相模せざるやう
にと安治に桐東市正重盛を
約束して活家仕置を沈しひら
文禄元年秀吉朝鮮国を征伐し
さまふとき伊兼中納言宇喜多秀家
を大将として陸乃大将を小西
摂津守加藤主計頭黒田甲斐守

船手の大将を安治九郎大隅かゝ
なり四月十二日肥前乃国名護屋
をのゝ船を出しけるぞ同月
末方を谷山浦小西船を先として
ちゝめゝ陸を陸の合戦船ハ船いくさ
ハて数十艘の城を押ゆ弦勝浦郡
へ押入ける備前中納言を都方を陣して
秀吉渡海のゝみとゝゝ城郭を攻
安治を谷山浦ハ陸ゝ東をハつゞ

地ゝれを十三日ゝ都方ゝ忍かゝて日本
乃依勝潮ゝ船ハ来ハ通ゝて敵
あまゝうち出ゝ敵ゝこゝゝ味方二百
三百を討捕ゝれば船手ハ大将をゝゝ
お候ゝて都ゝ方をゝまでの道筋
五里七里ハ間有ゝ偽の陣塚をゝ所
ゝゝ安治も家長腸切九郎兵衛七郎
ゝ歩卒三百人ゝ添て三月中旬
小船ゝ七里ハ山陸ゝ偽の要害を攻

ちうとゝろゟ六月廿日ノ暁ゟ敵数
百ゟ枝要害を取こみ はらくせゝ
ゟれぞ城中小勢ゟ
ゟくらいそぎ此名都へ注進し
ゟ安治ゟゟ
あ足しゟ路ばゟふて 初茶ノ時分
ゟ井ゟ ゟ都ゟ枝要害まで
ゟづゝふ七里なれども 同月 大河
あゟて 私みくゟゟ
ゟれぞとゟくゟ

ちつゝひゟり時刻うたゟてあゟ卯の刻
ゟ地ゟ敵兵数百こゞゟさ山ノ
陣をゟくひゝゟ安治敵のあゟぞ
十七八町ゟゞゟ山陰ゟ旗を
ゟゟゞ家人山岳太迫を先駆ゟ
て一遍うゟゟゟゟゟゟ敵陣
を見て 栗ノ相遣ゟとこゝ
いゟめさてゞゟくゟ城中ゟゟ
安治ゞ旗を見てゟこびゟゟ

内外の味方一せいに鬨をあげ時を
一回に敵陣かけ〳〵入敵兵こらへ
ぶ〻して後の山に引きたちぞく
とみるゝ中に安治敵の後面
なる山へ旗あげ幣をもたれば迎場
我先かと旗なびけ四方八面に加け
ぬきうちうひたれば敵即時に
敗軍を石山後かに追つめ〳〵或を
きりてはつるもあり或を生捕り

生捕をあらせ時の間か敗亡の敵陣を
討級かゝて生捕の二百人あまり
首数一千余枚山中に掛置け
ぬきうち日本より相を脇に蒲生
三河守殿はせ来て後詰しけるが
此合戦の翌日安治が要害へ
戦場に掛置けり首数なるべ
生捕の者ども大に感じけ
れば安治一日逗留して面人数を

たをしく安治をいかしてはしる船
それころ又唐橋表へ番船四ツくいづ
のゝ都へこさうんれば脇坂九郎
かゝ蔵之人を番船押へのこめうとて
いそこさ熊川小地内ゆたのをも
ひさ中をとをして日本うをしられど
秀吉大こさうみ感じて回筒とさまゝ
去七日十九日伊進州七日ゆこ
同刻刻来ら家投見ら船こも

がい口番船為弾丸国和越しゆ知ら
九郎加蔵安之人和泉母越度板
を紛平逆ニ討果ら以去又日
を方陣取へ一揆数万人取
を逃切崩数多討捕く首并
生捕くを掛元くをらを取ら
刻所相見脇坂蔵之河内書州
同前ゆ越し移骨くをこをえく
儀為細ら四治ゆ備大名形ゆ備

播田方面より注合越ニ中宮に於
山中橋内本下中合て中之通

六月廿三日　秀吉朱印

脇坂中務備ヘ

脇坂九郎か為ニ人数ヲ十四日ヨリ合海
の川に引ヲ入ル　指上ル歌の書
船討捕べき評定しけるが九郎
か為ニ船ごしらへ相整ヘ安治
ヲ勢だうめ　七月ヨリ唐鴻表

へ船を押出しけるヨリ摂戸内ヨリ書
舟ヲ捜ヲ捜ヲ船ヲ多く鉄砲を
うちかけ対だいとうしけ
書船をこうぼ走ちぞきけるをさ
ドもなく攻て之置ばら迫ゆくが
為船せだき摂戸内を通て唐さ西へ
いく一度ヲ櫂をやらなを大
船を翼のヲて味方船を引
包みけつめし引ぬ射ヲ引ほどう

味方の船の中小手負死人等うち
歌を大船味方を小船なればかの船
ばかりにて乗えて女乃浦戸内へ引き
ぞかんとせしときに歌の書船をも
けるく味方の船へかりうつ矢を
なげつれて即討死す向安治
が家臣脇坂九郎兵衛七十郎を初
めて名あるものども討死し
うちとられども安治を櫓数のれ用き

ちや船乗はけれは魚引自由に
てきれ分悪なりといへども猶矢
をあらてあやうき事十死一
生なりさるに歌船いるくき
れひうつ矢を射うけ
られぬを安治が早船をはなる合海小
引とりぬ討をとられ手負二百
餘人を陸地へ上ぬ内ぞうち漕
ぎ小鴻の船とにけくをの

舟をあらけうとき番船迎来て
味方の大船をやきうち黒鴻たる兵と
いひしものはそれ日の船長しらしが
此船をやのがれうんを辛さ気ばら
しとうてをせんなるまてふたび軍中
ふく諸士ありあるくとも元繁なる間
屋しそて脇切死しうち此とき
九鬼か数あ人を安治をて有虎鴻て
船軍よりけまけりうとさて池むら

けうが歌俗多の大船をれば乗れ
して二人ともうち安宵浦一引ゐね
番舟ををひゆきさて日嘗間まく
安宵浦て漆かく船軍しうち
にくもまく味方うちまけ九鬼が舟
の忙相ををうちやりうち兼て入く
番船を虎鴻へ引ちうきかくて
虎鴻浦の小鴻うりけうし中幣が
衆人焼捨らし船板を代有水ち

陸地へわたらんとて番船十艘ばかり
ゆき書翰を投げ渡すに若干の船
十三日の間松のみどり海藻を食し
て番船乃引きうすく薄をうかべひら
ひこころ又唐船書へ日本の兵船俗
多むふとさてて番船俗引退
それ陸より投渡しるを或る人十人て
幾りのうく陸地へわたりけるを番船
海をとりてかへ海色ゆく十人ばかり

射殺しけるを殺るものと二百人ばかり
やうやく虎にをのれかゝき命を
かろく合海へ打ぬ此事日本は
きこえあれば秀吉より書を作渡
る虎ねりの和泉守を使として書をと
しるまふ

六七日かゝいさんにへ和船作る
敵船招向こと大船焼失る
之を地次步こい極神奈合動くそ

芸州へ仕合ト侍こと身毋異
様ニ而ハ無之ト紹ハからいさんな
城を拵九鬼大隅守か為ハ有る物
ハ三人中候歟固ハ番ニ仕
ハ太ら通為ニ而ハ作州為ハ作濃守
ら拵をハ仕番船ハ出ス為へ
自地績人数を今迄治ニ紹ハ
彼雑宰相人数ハ外紀州へ
ハ出ス拵をハ出ら拵をハ出ら

脇し委曲為ハ作濃守ら仕合と

七月十四日　秀吉朱印

脇坂中務ハ捕ら

かくて安治唐津表ハ出て番船有
うちまけ士卒ハ多討せけ事を
遺恨ハ有ハ出て番船と今一戦せん
ハ有ハこなすを仏ハけうかぶ
番船ハ約あてさらけ方ハ敵
兵物見の船を見付即付ハ

ことゝを拾切し大将とみえしを
生捕にし獄よりて是なるかかど
爲て敵陣へ逃そうぬ恪り唐船表
番船軍ハ中さか八百乃大将と成て
来りしと船ちをれとをやうなく
蕃けれを熊川へ引ちぬ
同二年正月より脇坂九郎か番熊川
を陣せし番か番船百俵縷入りて
毎日みるのうち押四大矢を射げ

石火矢をうち入はてうきけまは漆の
内りはるさ是ろ日本乃大船小を
大筒を仕鉦陸りをまる鉄炮塚を
つさゝ番船押入とは船陸ともに
鳴雷ハごとくうちうちけまはを
これかしひろむ事迄もなくうちき
けまはいゝて此番船を討捕へを
をゝ相渡しけるを敵を莫大の番船
ふゝ鉦引由なる称を面くハ早

船に長縄を入く番船をとれば其
ゆめくゆめとそんと相定てまちうけ
要に二月ハ一日ハ番船まもるみるとも
うちへ案入ぬをのく早船にのりあら
ゆり我先さかふと番船を押けけるハ
安治が早舟一番に押かけ番船に縄を
とけ案捕うやこころに九鬼が早船
よりとをまきそれ船に縄をとけをく
番船にのりあらそ前後をあらそひ

金成まちくなるもしとき安治いらて
縄をひけさけ九鬼が船の縄をきり
ちれを一しと下知しければ安治が
家人之宅庵船が郎ハ松ヶ世と色
て九鬼が縄を切ちれし絶ることを船を
のりあはせ九鬼と脇切と洗
四士軍にをんとくれども敵
味方の船に押寄てらをてそこ

ふくゝ事ならはけちをもあいさ有
敵船庭より矢を射あげ候へば安宅
従兵熊谷惣介と云ものを外痛を
あらて死を外痛をかつ者を
はかりをもはさかゝ者を一艘ゝ
焼て九鬼脇坂こゝひて兵庫をわ
をひ双方日本へ注進しけゝ安宅を
家長脇坂光嘉を使者にして
ほ面びらゝ云上ゝ横目河内馬助

より也し脇坂一書ゝ如ひとゝ
ゝ秀吉安宅ゝ回章をゝまふ
五月廿三日ゝ生駒親俊細川忠興
鬼ゝ仍敵書船を組細川有
ゝ漆口押入ゝ如二艘奈捕ゝ内
を艘ゝを方兵前ゝ切ゝ宅
粉骨神妙ゝ
相励事専一ゝ遠海情を入
戸越ゝ脱ゝ

作者作し

三月廿八日　秀吉朱印

堺より安治赤隆赤明赤房と為丹と
相戦し　ふなかつとうし　武き一艘あ
りひき二艘のうち此つれ　れば其後
黄船やう角遠ざかり此事
日本へ　きこえければ　秀吉より
安治丹書をとらまふ

一　無らの作者は
来書らの成沙汰海一揆京黄船
已下拾切ら作対ら唐平均は
き万ら成縦欲船乗しれ
陸地、取とり拾動ニ丹ら糸
城壁国拾下丹ら元前黄
船京捕ら成手拾ら乃へ来た
私ら乗事も元国ら手前
越後さへ　ら八拾海事

一　こもづいに陸を回船分銭を取
候ものと船賃を船賃に相渡
滞候ハヽ船方ハ下沙汰米迄
休作被指立ハヽ此度船ハ越ハ
自然と時之兼とあけさせん
なれども其儀ハ当矢八幡
不可成事

一　鉄砲大小別分回船ハ其儀を以て清
取置ハ此者ハ前拂庭仕
之了簡時ハ乗出ハ之間ハ下拘
置事

一　兵粮蓄ハ要害ハ蓄積入精拵
所要作事

一　自船ハ部迄ハこの城こまま
相拘置ハ自由有之相ハ
遣ハ之儀ハ仲沙切ハ沿進
結入ハ為越ハ堅法命

二ヶ月也

十一月十日

秀吉朱印

脇坂中務少輔殿

彼地へ天くり付候事幸ひ案内思食
小袖二ヶ下ト将又朝鮮板ゟ有
板ゟ進之候付てゟ作出仕候
ふ首尾板ゟ成ト向後ハ吉兵ゟ有
姿之上所要ト彼地人帰ト也
之年の暮ゟ秀吉ハ命ハ

朝鮮船長浦ゟ乃ゟ出で此塩屋国小
あひ国へ水路の諸将安骨浦小西宗
をかまへ対馬ゟ立書をくり
まゝ有まして脇坂九鬼か為三人国を
やらけゟ安治一書国ゟ安骨
浦ゟ国ゟ越年三ヶ月ハ九鬼か
為日本小ゟ下ぬ形さ之の
之二月九鬼大隅守ゟ出して
安骨浦ゟ来ゟ成ハ安治ハ日和ゟ

かゝりける

同日年安治ふつゝひ海してまつ
安貴浦を過るに朝鮮國中海陸共
ありやうに治味方の陣中物騒
にて或は樂をなすかしく
奥より時をあつむ或は躍をかけて
さゝゝむ形はもつて菓乃湯酒高
乃あそびみく光陰ををくられ
それとしをほどなく暮ぬ

慶長元年の春安治まさ日本にかへり
同二年四月のすゑ秀吉ふたゝび
朝鮮國を征しさまふ安治まさ渡海
ゝゝ時日本の兵船も數多渡あるゝ
對馬より答山浦へ向てこれとせて
歌の書船數百艘ゝゝ唐濤表まと
答山浦へ押むひ日本船渡海を
ゝゝゝ招んとゝゝゝとゝゝ折ふ
大風俄に吹来海上波あゝくゝ

れば書船を本に唐土湊より引
きちぞこさ日本の舟をちらくまなりて
やう角く答山浦より出ゆ分
安治を兼ぬ乃ころ答山浦より船
をこれをこうろ志ちらく逗留
て九月か晦日家舟
をのく知ら唐土表の書船
にちらくちらきさせば日本乃兵船
海に磯とし船をに鎗を一を
丁相くらるとて無川湊より出ゆきく
大船を作り唐土表へ押いかに
書舟をうちちらく張将をのく大船
に無川へ乃ちらく張将をのく大船
をそにちらく無川より唐土表へ
うにあひる八九月廿ちち枚唐
土乃みるを書船の船をよき亦にて
無引自由なれぎちやちく討ちら
へきところあらど日本の大船を名

一番りそろへ大敵繰螺を相図に
いづくまでも追詰のり捕取し申
抜剣しこれをかくを越度
そうでとかうおさめて七日
七日の夜半に無川漆ちかく
船を押いで唐鴻喜へをしこひ
ゆうかいとうりゆう義を作渡当
高虎かあたれ馬助赤助二人早船
ゆうの日抜剣して堺戸のうちに
て義を高虎書船一艘ゆう捕ゆう
安治が地見の早船こきをゆうく
いひゆうは書船数百艘堺戸四の山陰
ゆう沖なる浦つでさくかくゆう
高虎早船ゆう取糸堺戸乃うちゆく
一艘ゆうとうとひけきば安治ゆう
ゆくく大船にうををかうべしとて
早船ゆうて橋をとゆめ池へれば
夜明ごゆかあ義赤助が早船をゆう

なるべき堺戸の内より浮びいづる海賊
の番船の中へ安治と赤明と兼隆を
あらそひ押かけ二人とも有りて
捕らえ生をとどめ諸手乃大船
小船をあつめ番船所所
敗軍し沖をさすてのがれ行
を追ものをもひかけ討捕ぬ

此日の軍より安治が一手みな賜恩義
布施雇人大野次郎三宅庄助水野
かたなどあるひは沖へ出とも有
堺戸にくみしもあり上船数十六艘
なりとか言虎赤隆赤明が兵船
数あまたあらんにはをの〳〵日本へ
注進と秀吉解をよろこびとまふ
此とき陸の大将小西摂津守行長横田
福原太馬助さまを今度唐船の船

軍勢安治ゟ動他国をゝれうれ
沼進しけるあひだ秀吉より安治ゟ
迎船をこまふ
六月十日ゟ書状細々家数人
を囲かゝ浦浦ゟおゝく敵船数
石船有ゝ而、指向数刈ゝ我
敵方船多進来ゝ而ゝ
方人数しゝ和換ゝ而元亨石
打ゝ取ゝ下敵作写ゝ

八月十日

秀吉朱印

勝地中務ゟ補ゝ

此時
東照大権現をそれ戦功を感じ
ゝて安治ゟ状書をくゝこまふ
今度おゝ書船ゝ討捕ゝ而
ゝ誠世ゝ沙汰動ゝ恩ゝ於
我ゝ大ゝ山中ゝ指向船
上ゝ高下ゝ号ゝ元亨ゝ

八月十五日　家康御判

脇坂中務少輔殿

相ゝ元日来申若者共入洛
者ら治強之御内ゆゑ要に
ら治大明ら日本解国の急節を教ん
て漢南の勢五十万騎ら越今
が洞門とふ所城郭をうゆへ城
をはら焼をうけ二三万騎だうと
籠り居ら備前中納言秀家城を

せうもとて水路乃依将を率ゝ九月
十五日小をゝく洞門の浦ら つさゆ
城乃東ゝらは備前中納言秀家南を
安治茂也依波也言虎而之九月大陽也
赤隆系鳴兄弟小ハか茂たる物赤物茂
平大蔵射ら ゝこれけ日十五日ゝ東之
ゝゝ四方ら仕寄をつけ鉄砲石
火矢ゆて遠攻めゝ東南ゝ
ら やらべきと 桐宗 ゝ 飛騨

玄蕃は用明天皇白髮部ごと
安治と云る虎ひそうふ蕃ゝ守るは
兼的れば歌乃ゝこと強ゝ弓也
弊を押借なるを手間をいろゝ
ゝ育ゝうゝ家ゝ城乃
櫓へ大筒を二ゝつゝうゝへをいさゝび
ゝ家ゝ間をあげ竪を越る垣乃
根小屋ぬきゝ塀中ゝを大勢ゝを
面のゝごゝく寄ゝ手ゝ原死人を多

かゝさゝゝを垣ゝゝして漆膠
ゝゝ礫乃ごゝくめゝゝたゝやすく
家べきやう形ゝ安治云虎やゝて
ゝひゝゝをゝさゝ三をゝそゝひ
のゝけゝば此ゝの弊ゝも我先ゝと
家入ゝゝゝぬゝ二九まで四ゝゝ
塀中ゝもゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ味方乃弊ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝて多弊ゝて中ゝ乃入ゝゝゝは

組うちし或を追つめて首をやるに
たとも戦うを見をはげまく之方に
諸勢一同に攻めけるぞ其後
敵二ようり討捕ぬ安治首級を高原
を得うり敵こと〳〵を敗軍しそれ
兼て為ゆけり翌日早天より一日
攻追ひて山をうり里をはげし追
詰〳〵拾切めし十日あまりの
あひだに敵のうち敵数百討

捕れば首をそろへて鼻を
切〳〵首数をかぞへけるに此ときに安治
首数二ようり拾切とりぬを後船手乃
依将いづれも南海へかうり十一月
中旬より要害をこうらへ寄に
か蔓肥後守清正蔚山に要害へ漢南
人数百より盛せひより十二月廿四日
小泊進と船手の大将こと〳〵蔚山
の後巻ひて地ひなるに廿七日巻

風をげしく吹雪さらに降れ
ば安治船をやらはせ九日卯の
刻に西宮浦といふ所に着て
摂津守家政とに分て蒲山
をいそぎ攻る
同三年正月二日小蒲山を攻
四日に来の刻の合戦と城壁の依勝
也せたる日に漢南に勝まる
敗軍しけるを二里ばかり追掛勝
討捕ぬ安治が家人すは勝に乗
福原が屋敷を宅所の前をとり囲く
して各〳〵陣取へしと相図日を
蒲山に追掛し六日まをく
南海乃城をかこみ攻しの
去依勝ことく〳〵陣しに日なを
かゝりかゝて秀吉勢雑国を陣の
軍よりも戦労を賞し爵禄をあく
しこまふ安治に感状をくまふ

お今度朝鮮表書船切れ切れ別
物骨ゝ恐神妙ゝ思召仰付
前代官所ゝ同じゝ之儀事
今扶助筑金ニ仰付ト

慶長三
六月廿二日　秀吉朱印
脇坂中務少輔ゝ
同五年乃秋逆徒ニ
関係をくゝて

東照大権現ゝそむきたてまつり
濃州山中関原ゝ出張してふせぎ
ゝ海つゝんとし
大権現かれ乱賊を追伐し四海を平
治しゝ海ゝんとて関東より日光山を
ゝ
ゝとまふとさうそうしば安治が
息男淡路守安元を関東へ召そひ
ゝに上方志ゝゝ小勝動して幽次
乃ゝまひしもと海ゝれしひそゝに関東

使者を差上こと分を江州ゟ大坂
へ
大権現安元年御書をもつてこまふ
山畠道の所耶へ〻中世投足迄
ゟ紙元亮し紙上方惣劉浪人
ゟ紙元亮し紙父子立お様
ゟ居国ゟ子亜所要ニト迄日今上
洛ゟ来於相子ニ〻ん易し城
織紙佑下ト来ゟ有略ト云也

八月朔日　家康御判

大権現ゟ小関東ゟ敵向しこまひ
濃州赤坂ゟ御陣をうたしこまふ
脇坂父子ゟ大坂ゟ淀川山中ゟ
しひ〻ゟ九月十又日辰の刻ゟ一戦ゟ
筑前中納ゟ豊臣秀秋と安治おれ
ゟ悪男安元ゟ称てゟの門ゟ
なれば御味方ゟ成ゟ　のちゟ成

敵軍を
大權現伊吹山の麓小山に陣を
うつしまゐらせし脇坂又右衛門
けるに
大權現我山を旁しくまゐらせ名張
始終まゐらせ先ちつかせ
大權現乃幕下に属しまゐらせ海つる
かくて江州伊賀和山の城主成が兄
石田治部少輔とひしまの橋龍ゐれば

ゐを追伐をつかまつる
くまゐる日牧原の宿に陣をかる
翌十六日に伊賀和山の城へせまる
十七日卯の刻より脇坂又右衛門の城の
南大手にはせ押入さびしくせめ
ら午の刻ばかりに落城しぬ石田
治部少輔泉沙又右衛門上野喜兵衛
子ホ十四人生捕にし堀和泉守を
ゐて
上野小達しゐれば

勾命くだち

大樹現いよ〳〵感悦ましましけるかくて
佐和山も落城し石田が徒党悉く
亡しさまひて後大坂よりよせ
是海ひ安治少将西国船にて渡海いで
入のたゞちより川口を警衛すべき
よし　仰付られける
同十四年九月より淡路国より伊与国
よりうつされて喜多郡風早の二郡
にして五万三千五百石を賜ふ

元和元年豫州にて領地を長男淡路守
安元にゆづり同三年洛陽にをいて
て西洞院にかくれ住
寛永三年八月よ病にかゝりて
卒ス年七十三妙心寺に葬る源松院
法号ス

安景
外記

元和元年六月大坂騒乱のとき伊達
陸奥守政宗ハ屬し大坂道明石に
いたり首二級を得て戦死ス

女子
渡邊七右衛門が妻

女子
作野勘七が妻

安忠

安元

甚内　早世

甚太郎　渓路守ハ任ず
慶長六年　正月
大樹様の命をうけ諸侯に従ハ位下
叙し侯ハ江戸ハ来ル
同六年安元ハ徳院殿ハ召ハ
同十六年安元が妻を縁列ハ

江戸へうつる

同十九年大坂の御陣のとき

右徳院殿乃御命をうけ先鋒奮戦

和泉守忠虎と相ならび生命を

しらずゆさてせめたかふ

元和元年大坂再乱のとき

右徳院殿の麾下に属し

ひろ山大炊助利勝と天王寺表

向てせめたふ

同三年

右徳院殿乃御命をうけ西乃方伊豫国

より信濃国任案部上総一家めく

五万石の采地を給ふ

寛永十三年 癸十二月六日 朝鮮国

乃信使任絖金世濂英庶弟武列

江戸へ来貢し旅館を於寺乃

あるとき安元

将軍家乃右命をかうふり安房太守進と

たゞ〻く知恵人と成事を
ほこさどう同腹自然難の信使江戸を
うらてかてゝ

安信

甚九郎
浪人信下小納し白水西下使ど
病死し

安英
甚九郎
安正
山之郎
安長
久之郎
女子
池田之助の妻

安重
右馬助

安之
右門

安忠
三十郎

女子
服切小兵衛が妻

女子

安經
虎松
後五位下有叙し仕源左任ず
安元が養子となる早世

安方
白馬助

国立公文書館
National Archives of Japan

安俊
　駒之助
安次
　虎之助
安通
　源之助
女子
女子

安成
　甚蔵　蔵人　病死
元淑
　沙門となり妙心寺隠居
女子
　清水谷宰相の妻
女子
　勝牧牛之助の妻
女子

女子
脇坂伊織が妻

女子
田中源太郎が妻

女子
脇坂宗兵衛が妻

女子
脇坂五郎助が妻

女子
庵光寺沢郎八が妻

安利
左兵衛
堀田かつ賀守正盛が弟なり
将軍家光鈞命をうけて安元が養子
病死

安右
長太郎
堀田かつ賀守が二男なり

国立公文書館
National Archives of Japan

寛永十七年八月十五日

将軍家乃勅命をうけて安えが書る

やう〳〵九月十二日ろう堂こゝろ

家の紋初ゑ桔梗梗遠小あらしこゝ

小南それとも志ゝ歩ひらさゝ

ゆらぐろのすゑ乃蘇原

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan